

千堂 級装甲巡洋艦(改 大庭《超甲巡》詠美 級もしくは超超甲巡 級)

(元ネタ こみっくパーティー (Leaf) より 千堂和樹、九品仏大志)

この記事は「世界の艦艇」昭和61年5月号の特集「さらば、壁際戦隊」の記事の一部より抜粋したものである。太平洋戦争及び第三次世界大戦に従軍した乗組員からの聞き取り調査を元に行っているため、現在知られている戦史などと大幅に食い違っている部分があるが、編集部判断であえてそのまま掲載することとした。

大庭《超甲巡》詠美 級装甲巡洋艦(1)は当初50口径31センチ3連装砲塔を3基搭載する予定であったが、主砲が38センチ砲に換装されるというドイツの 木下《シャルンホルスト》留美 級に対抗するため、41センチ連装砲塔に変更されて完成した。同級2番艦として建造されていた 千堂 級もどのような改修を受けて完成するはずであったが、先に完成した 大庭《超甲巡》詠美 が戦艦と同じ主砲を搭載しながら装甲がそれに見合うものではないという防御上の欠点を持っていたことにより、これを是正するため 千堂 の建造は一時中断され、対応策が艦政本部で検討された。 装甲を厚くするという案も出されたが、そんなことをするくらいなら始めから 新城《穂高》さおり 級高速戦艦を建造した方が良いとまで言われ、性能的に中途半端になる 千堂 は建造中止、解体の一步手前にまで追い込まれた。そんな中、1人の人物が 千堂 を救った。その人物とは、亡命ドイツ人技術者のコミック・ツェット4等軍属(中佐待遇)である。彼は「試製Z砲」の秘匿名称で呼ばれる新型砲の開発責任者であった。{{br}} その「試製Z砲」とは砲口の口径は38センチだが砲尾の口径は41センチというこれまでに類を見ない砲——99年式55口径41センチ口径減退砲(またの名をゲルリッヒ砲)——であった。この砲の原理は、発射された砲弾がだんだん細くなる砲身を進むにつれ圧迫され、その圧力によって加速、砲口から高速で飛び出すと言うものである。(ホースから水を出す際、その口を狭めると水が勢いよく出ることを想像するとわかりやすい)。ツェットとは、このときすでに試射段階に入っていたこの口径減退砲を 千堂 に搭載することを主張した。この砲は約1100m/秒という凄まじい初速を記録しており、その運動エネルギーは 高瀬《大和》瑞希 級の46センチ砲をも上回っていた。千堂 はこの化け物砲を搭載し、敵戦艦を専門に撃破せよというのだ。口径減退砲はその構造上、砲身寿命が短く、無駄弾が撃てないという欠点を持っていた。そのため砲戦時には命中がかなり期待できる距離までに接近しなければならない。それに必要なのが 大庭《超甲巡》詠美 級が持つ速力であった。しかし装甲の薄さがやはり問題であった。必中距離に接近するまで、当然敵の反撃もある。しかも想定する主敵は大火力の戦艦であった。そこで砲塔を1基減じ、その分の重量を防御強化に当てることが考えられた。口径減退砲の初速なら、低進弾道で命中率も高い。砲を多数搭載する必要もない。かくして主砲を55口径41センチ口径減退砲連装2基に、装甲を対41センチ砲防御に変更して 千堂 の建造は再開された。が、再開直後にまた新たな変更を余儀なくされる。アメリカ海軍の新型戦艦が33ノット以上の速力を有すると言う情報と、ドイツ海軍の新型戦艦が41センチ以上の主砲を搭載するという情報がもたらされたのである。これらに対抗するため、千堂 はオリジナルとはますます一線を画していった。{{bt}} さまざまな問題に巻き込まれながらもどうにか完成した 千堂 は、36ノットの速力と最大400ミリの舷側装甲を持つに至っていた。甲板装甲はオリジナルと変わらない125ミリである。舷側装甲の厚さに対する甲板装甲の薄さは、同艦が遠距離砲戦を想定していないためである。千堂 が砲戦距離に入る前——敵弾が大角度で落下する間——は速力を機動力を生かして敵弾を回避、砲戦距離に入ると直線行動に移らなければならない、そのときは敵弾落

下角も小さく、命中する箇所は主に舷側となるからである。ただし主砲射撃式装置はいざという時に備えて遠距離砲戦が可能なものとされた。千堂に36ノットの高速を保証する機関は、出力21万馬力の高圧缶である。この機関は高瀬《大和》瑞希級とほぼ同じものが採用され、特に千堂は森川《雲竜》由綺級の建造を優先させるために建造中止となった高瀬《大和》瑞希級2番艦武蔵のために用意された機関が流用されている。重装甲高出力の代償として、千堂の排水量は約4万トンにまで増大している。この重量増加に伴う安定性の低下は、甲板装甲厚が変わらなかったことと高い位置にあった第2砲塔がなくなり重心が低くなったことによって相殺されている。航空機は重量軽減のために全廃され、その部分は一段高められ煙突のある甲板と同じ高さとなり、ダメージコントロール強化のために増員された乗組員の居住区となった。煙突は機関出力増大のために若干大きめとなった、大庭《超甲巡》詠美と比べると、外見は全体的に面影を残しつつも変化し、性能も大きく変わっていることから、同艦は千堂級として、大庭《超甲巡》詠美級とは区別された。なお、改大庭《超甲巡》詠美級とも、超超甲巡級とも称された。大庭《超甲巡》詠美級の3番艦以降も千堂級として建造されるはずであったが、分厚い装甲に高出力機関、そして口径減退砲と、とにかく高コストになる要因が多すぎた。大蔵省に残されている当時の予算報告書を見ると、千堂級1隻の予算で、大庭《超甲巡》詠美級が2隻建造できる値が記されている。さらにこの時期、すでに同盟国のイギリスはドイツ第三帝国との戦争状態に突入しており、日本はこの英国の救援をしなければならなかった。この状況下、軍令部も連合艦隊司令部も、そして新たに設立された海上護衛総隊も、「ある程度柔軟に使える艦」を多数求めている。(実際、火力、装甲、速力に劣る大庭《超甲巡》詠美は大戦中、あらゆる任務で活躍している)。その点千堂級は高性能ではあるが、あまりにも艦隊決戦に特化した艦であり、(予算、生産性の問題から)数をそろえるのも難しかった。結局、千堂級の建造は2番艦の九品仏までで、3番艦からはまた大庭《超甲巡》詠美級として建造されている。千堂と九品仏はほぼ同時に完成し、それから数ヵ月後に対米戦が勃発した。この時点での日本海軍は、英国支援のため八八()艦隊計画艦も含む戦力の一部を大西洋方面に投入しており、その中には就役間もない高瀬《大和》瑞希も含まれていた。澤田《信濃》真紀子はまだ造船台の上。そのような状況下で、ダニエルズ・プラン戦艦16隻、そして条約明け後に建造されたアラバマ級2隻(残り2隻は当時未完成)を主力とする米太平洋艦隊の戦艦群と正面きって戦うのには一抹の不安があった。そのため海軍も千堂と九品仏の対戦艦戦隊(通称「ブラザー2」)に期待するところが大きかった。内南洋マーシャル諸島沖で行われた日米海軍の艦隊決戦(後に「マーシャル沖海戦」と呼称)において、千堂九品仏はその期待に200パーセント応えた。砲撃をかいぐって敵艦隊に肉薄、1艦よく3艦を征し、戦隊で敵戦艦6隻を撃沈するという大戦果を挙げたのだった。その中には米艦隊旗艦サウスダコタも含まれている。もっとも、敵に肉薄するその戦い方ゆえ敵の集中射撃を浴び、両艦とも判定中破の損害を受けている。千堂のある乗組員は、擲弾の降り来る中、最大戦速で突撃する状態はまさに「修羅場」であったと回想している。海戦自体も連合艦隊の大勝利に終わり(その主な要因としては、戦闘開始早々に千堂が米太平洋艦隊司令部をその旗艦ごと撃沈し、指揮系統を崩壊させたことである)、戦争は以後、空母機動部隊同士の戦いとなった。修理完了後の「ブラザー2」戦隊は一時期機動部隊の護衛任務にもついていたが、(この間千堂は「第2次ビキニ沖海戦」で防空軽巡 桜井 を救出する戦闘を経験している)、2度目の日米艦隊決戦「トラック沖海戦」でも戦艦キラーとして活躍、対米講和後の第三次世界大戦でも多数のドイツ艦を海の藻屑と変えている。第2次、第3次両大戦における千堂九品仏の活躍は両艦の艦長を抜きにしては語れないだろう。この2人は海兵同期の親友同士であったが、その性格はまるで違った。千堂艦長は良識をわきまえた人物で、部下の面倒見が良く、絵と漫画を描くことを生きがいとしていた。その自分の作品を機会があるごとに展示、もしくは配布し、乗組員からの好

評を集めていた。なお乗組員達は、艦長のその趣味から、主砲 4 1 センチ口径減退砲を「艦長の G ペン」と呼んでいたという。{{br}} それに対し 九品仏 艦長は、海軍でも知らぬ者はいないほどの名物男で、普段の言動から思想的に危険であるという誤解も受けていた（特に共産主義者としての誤解が多く、一部ではナチスに傾倒しているという噂もあったが、本人は「ナチスだろうが何だろうが帝国に徒なすものは我輩が沈めてくれる」と否定したという）。無能の評価には程遠い人物ではあったが、彼の部下は彼を嫌わないまでも気味悪いという印象を抱いていた。マーシャル沖海戦で インディアナ を撃沈せしめた際にも 2 つに折れて沈み行く インディアナ を眺めながら、「我輩のヴァルハラへようこそ、まい同志」と呟いていたことが副長により確認されている。その時の表情はまさに「地獄の支配者」のようであったとその当時の副長は後に語っている。大戦後も、千堂 九品仏 はその快足による緊急展開能力を生かして、1985 年に長年の酷使による老朽化で引退するまで活躍した。その間日本が関わったすべての海外紛争に投入され、いつしか「ブラザー 2」戦隊は「本土から遙か離れたところから壁のように帝国の安全を守る」という意味から「壁際戦隊」と国民から呼ばれるようになった。なお、1963 年に両艦は後部砲塔を撤去、そこにミサイル発射機をミサイル庫を設置する回想を受け、「ミサイル装甲巡洋艦」となっている。千堂 九品仏 引退後、これまで両艦が担っていた「海外展開の尖兵」の役割は、現役復帰し近代化改装された 高瀬《大和》瑞希、澤田《信濃》真紀子、大庭《超甲巡》詠美、そして新型の打撃巡洋艦 朝日 が引継いでいる。引退後の 千堂 九品仏 はその後数年にわたる予備艦状態を経て結局解体された。しかし「艦長の G ペン」こと 千堂 の 9 9 式 5 5 口径 4 1 センチ口径減退砲は一門が船の科学館に屋外展示され、当時の面影を残している。

■ ■ 要目

基準排水量 4 0 2 0 0 トン全長 2 4 4 メートル全幅 2 8 メートル機関出力
2 1 0 0 0 0 馬力速力 3 6 ノット

主兵装 5 5 口径 4 1 センチ口径減退砲 連装 2 基 6 5 口径 1 0 センチ高角砲 連装 8 基

装甲舷側 4 0 0 ミリ甲板 1 2 5 ミリ砲塔 4 8 0 ミリ

■ ■ 同型艦

千堂 九品仏 (1) 大庭《白根》詠美 の計画時の呼称である。